

(な)

ナイーダ



原作 U.F.O.ロボ グレンダイザー
参戦作品 第3次

性別 女

所属 ベガ星連合軍

出身 フリード星

種族 フリード星人

声優 杉山 佳寿子

【原作】第25話「大空に輝く愛の花」に登場したフリード星人。デューク・フリードの恋人である。ベガ星連合軍がフリード星へ侵攻してきた際に弟と共に捕らわれていたが、隙を見て地球へ逃れ、スカルムーンの追撃部隊に捕らえられようとしたところをデュークによって助けられた。久しぶりの再会にデュークは喜ぶが、彼女はフリード星を逃げ出した彼につらく当たる。しかし、その非難の言葉は、実はベガ星連合軍の策略だった。彼女は洗脳を施され、脱走したように見せかけてデューク達の隙をつき、グレンダイザーを破壊する使命を帯びていたのだ。彼女は、命令に従ってグレンを格納庫ごと爆破しよ

うとするが、防衛装置（なんとスペースサンダー）によって危うく命を落とすところをデュークに助けられた。彼はその不審な行動にナイーダを問いつめるや、意外な事実が彼女の口から語られる。

フリード星をデュークが脱出した後、人々はベガ星連合軍に捕らえられ、円盤獣の操縦者にされていたのだ（脳だけを埋め込まれているのかも）。しかも、デュークが初戦で倒した円盤獣ギルギルには彼女の弟が乗っていたというのだ。その衝撃の事実をつきつけ、デュークを人殺しと責めるナイーダ。知らなかったとはいえ、自らの手で同胞たちを次々と殺していたことにショックを受けたデュークは、正気を失ってしまふ。その隙をついて侵攻してくるベガ星連合軍。とてもグレンを操縦できぬデュークに代わって、甲児が乗り込もうとするが、防衛システムによって近寄ることさえできない。

そんな時、洗脳の呪縛から解けたナイーダは、自分がデュークを追いつめてしまったことを知り、グレンを爆破しようとした陽子爆弾を持つと乗ってきた円盤に乗り込み、一人迫りくるベガ星連合軍に特攻をかける。かろうじて自分を取り戻したデュークは、そのことを知ってグレンで追うものの、ナイーダは涙ながらに彼を糾弾したことを謝罪しつつ、侵攻部隊を巻き込んで自爆し、その罪を償うのであった。

グレンダイザーには印象的で記憶に残るゲストキャラクターが出演し、悲劇の運命に翻弄されて命を落とすといったストーリーが数多い。その中にある、このナイーダを扱った話は、ベガ星連合軍によって占領されたフリード星が、デューク脱出後にどうなっていたかを、初めて視聴者に知らしめ、また、その脱出が、彼にとって不本意ではあったにしても、同胞達からは非難される脱出であったと、視聴者に感じさせてくれる（しかも、デュークは王子であるため、彼らを統べる王族の一人、ひいては次期国王でもある。本来なら踏みとどまり、死を賭して敵と戦

い、民衆を救わねばならないといった立場もあるのだ）。そして、デュークが甲児や鉄也と決定的に違う点も見えてくる。実は、彼がそれまでのマジンガー主人公に比べれば、戦闘的ではないという点である。

彼が地球へ落ち延び、兜甲児と出会って戦う決心をするまで、彼はフリード星の王子として、自分を星を解放するため再び故郷へ向かうなり、ベガ星連合軍に対してのゲリラ活動を行うなりといった行動をなんら起こしていない。地球に降り立った際は、負傷していたとはいえ、傷が癒えてからの彼は、フリード星再興といった考えを、当初は持ち合わせていないように見受けられる。それどころか、むしろベガ星連合軍の侵攻におびえていたと言える（これは、デューク自身、どちらかといえば平和主義者であったせいもある。また、デュークを助け保護した宇宙源蔵博士自身、戦うことに否定的であった点も要因では無かるか？ もっとも、宇宙博士がデュークに対して親バカという過保護な所が少なからずもあったためかも知れないが……）。自分の素性を知る者のない地球で、自らの第二の人生を謳歌していたデューク。そんな彼を、洗脳されていたとはいえ、様々な辛苦を味わい、弟を（結果的には）殺されたナイーダが見たときどう思うだろうか？

この話以降、デューク自身の性格は少なからず変化している。それは、ナイーダによって自らの立場、逃れることができないうフリード星王子としての立場を、現実として突きつけられたからではないだろうか？ 最終話においては、彼がフリード星再興のため第二の故郷を去るのは、もしかするとナイーダと出会っていたからかもしれない。

物語上、絶対的ヒーローであり正しき者である主人公を糾弾するといった展開は、全編のストーリー構成を成された上原正三氏が得意とする味である（氏が書かれた『ウルトラセブン』『ノンマルトの使者』や『帰ってきたウルトラマン』『怪獣使いと

少年」などは、氏が沖縄県出身故にうけた傷を丹念に盛り込み、当時の子供番組としては、視聴者にそれまでのセオリーである地球人Ⅱ正義が本当に正しいのか？と感じさせる話となっている。また、この話の原案者であるダイナミックプロの桜多吾作氏は、マジンガーシリーズのコミカライズ版において、現在のリアルロボットもかくやと言わせる物語を展開している(最終回では、地球人に絶望したデューク最後の指示で、眠らされたデュークを乗せたグレンダイザーと、その兄弟ロボット・ラーガによって地球は壊滅、甲児とさやかを残し人類は死滅してしまうという衝撃のラストとなっている)。桜多氏の師匠である永井豪氏が、『デビルマン』(原作版)や『魔王ダンテ』において展開した「人とは守るべき価値があるのか?」と言った批判の継承者として、マジンガーシリーズのコミカライズ版を通して何度も読者に語りかけていた疑問が、このエピソードには盛り込まれていると言えるだろう。

これら様々な要素が混然一体となり、全74話ある『グレンダイザー』のストーリー中、この話は類い希な異色作となりえたといつて過言ではない。

なお、デュークには、ベガ星大王の娘ルビーナという婚約者がいるが、物語上では、本当に愛していたのはナイーダであったように見える。邪推ながらルビーナは、グレンダイザーのプロトタイプ作品といえる『宇宙円盤大戦争』のヒロイン「テロン」を元にしたキャラクターであったため、結束を似せるために出てきただけのキャラクターなのでは?と見えてしまうからだ(ただ、テロンナはルビーナに比べてかなり激昂型の性格であり、キャラクターとしては似ているものの、人物としてはかなり違う)。コマンドー・キリカと並んでもっともファンが多いキャラもあり、傑作の誉れ高い話である。

【第3次】シナリオ「悲しみの果て」にて登場。原作と似たシチュエーションであるが、洗脳を施したのはあしゅら男爵となっている。乗っているのがコ

スゴスなので、敵に回すと結構手強い。あしゅらのグルルを撃破しないで、ナイーダを攻撃していなければ、デュークで説得して味方になる。ただ、NPCであるため、ほっとくと勝手にやられてしまう。この辺りは、原作の性格をよく反映していると言えるかもしれない。シナリオ終了後は去ってしまうので、修理ユニットと精神コマンドで治しつつ、うまく削り役を持つていくようプレイしたいところ。

あしゅらに先に倒れていると、必ず説得に失敗するのでその場合は倒すしかない。できればデュークでとどめをさしてあげましょう。ちなみに、倒してもデュークが戦闘不能になるとかはない。

流竜馬 (ながれりょうま)



原作 ゲッターロボ
参戦作品 第2次 第2次G 第3次 EX
第4次(S) F F完結編

性別 男
所属 浅間学園(サッカー部) ↓早乙女研究所
職業 高校生
出身 地球(日本)
種族 地球人(日本人)
主な搭乗機 ゲッター1 ゲッタードラゴン
声優 神谷明

【原作】イーグル号およびゲッター1(後にドラゴン号およびゲッタードラゴン)の操縦者にして、ゲッターチームのリーダー。通称「リョウ」。浅間学園三年生で、サッカー部のキャプテンである。

物語開始時には、早乙女研究所の訓練生としてすでに戦闘の訓練を受けており、操縦に不慣れなハヤトとムサシを先導していた(もともと、「天才」ハヤトはすぐに適応していたが)。また、ハヤト・ムサシが「オレが、オレが」と先走ってしまうようになるときにも、常にチームワークのことを考えている真のリーダーでもある。外見は一言で表すなら「さわやか」、その精悍な顔立ちと太い眉には、強い意思が感じられる。

その肩書きからもわかるとおり、責任感が強く、そのために悩みこんでしまうことも多い。また、頑固で一本気な面もあり、時に頑なに自分の意見を通そうとすることもある。そのパーソナリティーは、高所恐怖症を克服するために、釣り橋から飛び降りる秘密の特訓をしたり(3話)、村人になじられたことに責任を感じて、危険な作戦を執行したり(32話)と、さまざまエピソードで如実に表れている。そのため、他のメンバー(特にハヤト)や早乙女博士と対立することもしばしば。ハヤトとは、時に激しい殴り合いに発展することすらあった。もともと、心では通じ合っている間柄である。口では悪態をついていても常にお互いを信頼しあっているその関係には、すがすがしささえ覚える。それは、「青春物語」としての側面もつ『ゲッターロボ』の特徴のひとつであろう。

あまり語られていないが、彼は九州出身である(これにしては九州地方特有の訛りはまったくないが)。父・流竜作は剣道・流一刀流道場の師範代で、超がつく頑固者。リョウの頑固な一面は父の遺伝子を受け継いだことはもちろんのこと、その風土・環境が養ったのだろう。

このように、幼いころより剣道を習い、達人の域に達しようとしているリョウではあるが、父の元を離れて、学園生活ではサッカーを選んでいる。これは、父に対する反発心もあるだろうが、それにもまして、「剣道」という孤独な「武道」よりも、「サ

「サッカー」という仲間と苦楽をともにする「チームスポーツ」のほうが彼には合っていたのだらう（もちろん『ゲッターロボ』のネーミング・デザインにサッカーが取り入れられているという側面もある）。剣道・サッカーという二つの道を歩んだ彼だが、双方ともにゲッターチームのリーダー、また操縦者としての彼の大きな糧となっている。サッカーにおいてはチームワークやキャプテンとしての役割、剣道においては、対メカ鉄甲鬼戦でのスピンキッカーによる居合抜きのような戦法や、時折みせる真剣白刃取りのようにゲッターでの戦闘において活用させている。さらに、恐竜帝国や百鬼帝国は時に、リョウ達生身のパイロットを狙うこともあり、彼の剣術は、キャプテン・ギルバ、大剣鬼、角面鬼等との生身での戦いにおいてゲッターチームを勝利に導いている。

また、母は病床に伏せており、妹のジュンは彼の目の前で交通事故に遭遇して不遇の死を遂げているなど、哀しい境遇でもある。また、それが彼の弱点となつて現れたのが、第34話「女竜戦士ユンケの涙」。彼は恐竜帝国の女戦士ユンケが変身した、死んだ妹に似た少女「ジュン」に心を許し、策にはまってしまうのである。このように、彼の人を疑うことを知らない純粹さは、時にチームを窮地に追いこむこともあった。

物語が『ゲッターロボG』に移行すると、前述のような頑固な面は少しずつやわらいでいき、時折おどけた表情も見せるようになった。なぜ、苛烈な戦闘をくりぬけてなお、彼は柔和な顔を見せるようになったのか。それは、殺伐とした戦場においては、笑顔こそが人々の心をなごませるのだと気づいたからではないだろうか？ もちろん、そこには戦死したムサシの影響があるに違いない。いつも笑顔を絶やさなかったムサシが、いかにチームの士気を高めていたかを、失つてあらためて気づいたのだらう。また、恐竜帝国に打ち勝った自信・経験がもたらしたのだらうか、戦士として成長したリョウは、より

完成された「リーダー」として描かれている。時にハヤト以上に冷静に状況を判断し、ゲッターチームを勝利に導いているのだ。

さて、リョウは『ゲッターロボ』という作品内でどんな役割を与えられていたのだろうか。「優等生タイプ」の熱血漢」というパーソナリティは、「クールでニヒルなライバル」のハヤトや「おっちょこちよいで豪快なコメディリリーフ」のムサシと比較して考えると、非常にバランスがとれている。ハヤトとのチーム内ライバル関係も併せて、この三人の組み合わせが後の作品に与えた影響は大きい。兜甲児の「わんぱく少年タイプ」と対照的なカタチで、リョウの「優等生タイプ」の熱血漢」は、後に続くキャラクターのベースックとなつていったと言える（こうした主人公の性格の違いは、後発ロボットアニメであった『ゲッター』が、『マジンガーZ』との明らかかな差別化を狙った結果だらう。また『グレート』の剣鉄也ともまったく違う性格であることもこうした意図があったのかもしれない）。このようにリョウは、常に正面から正義のために戦い、作品を「締める」役割を担っていた。だが、スタッフのコメントを参照すると、「リョウはまじめ過ぎて動かしにくかった」という意見が目につく（ノーヘルでサイドカーを乗りまわすのは、とても優等生とは思えないが……）。また、キャラデザの小松原氏によれば、彼は西条秀樹をイメージしてデザインされたらしい。いかに、彼のキャラクターが「正統派ヒーロー」を目指して作られたかを感じさせるエピソードである。

しかし、その「まじめ過ぎる」性格が災いしてか、ヒロインである早乙女ミチルとの間柄は遅々として進行しない。『ゲッターロボG』終盤になると、完全にミチルの心はハヤトに行つてしまつている（それどころか、物語自体がハヤト中心に展開していた）。いくら動かしにくいキャラとはいえ、この扱いはあんまりである。彼は少なくとも（他のメンバーと同様に）ミチルに気があるのだから、三角関係・四角

関係の恋愛物語が展開されてもおかしくはなかったのだが……。そして、そんな彼に訪れる恋物語は、常に哀しく彩られ、美しくもはかない。前述のユンケとの物語しかり、名エピソードとして名高い第66話「赤い蝶のパレード」（キャラ名鑑「胡蝶鬼」参照）での、胡蝶との出会いしかりである。胡蝶に向けた「もう胡蝶鬼じゃない。美しい胡蝶さんだよ……」というセリフは、彼の人柄を表すとともに、聞く者の胸を打つ。

また、「流竜馬」を語る上で、神矢明氏の声の力を無視することはできない。氏の発する「ゲッタービィイイム！」「ゲッターマホウウウウツク！」といった特徴的な叫びは、回を重ねるごとにステキにエスカレートしていき、次第に物語に欠かせないものとなつていった。『ゲッター』に続く数々のロボットアニメに必須ともいえるべき「神谷シャウト」はここで完成されたといつても過言ではない（ちなみにその元祖は『ゼロテスター』であろう）。

そして、避けて通れない話題として、石川版「流竜馬」との関係も述べなければならぬ。どうも若年層（この場合中学生以上）の間では、石川版流竜馬に比べて、アニメ版の流竜馬の印象が薄いようである（それどころか、石川版のリョウのみを賛美する声も）。確かに、石川版の流竜馬の強烈すぎる個性は、見るものに衝撃を与えた（キャラ名鑑・流竜馬（真）参照）。しかし、石川版のリョウはあくまでも高年齢層が対象である。このころのマンガ家は石川氏のみならず、石森章太郎氏、桜多吾作氏のようにならぬ年齢層を対象としたコミカライズ展開をすることが多かった。しかし、それはあくまでも圧倒的多数のTVシリーズのファンに対する一部マニア受けの発想で生まれた派生バージョンである。そして、石川氏の『ゲッター』はその中でも特に傑作として人気が高く、度々愛蔵版での再販がなされていた。そんな中で「スーパーロボット大戦」が発売され、TVシリーズをまったく知らない人々（概し

て本来のアニメ版『ゲッター』よりは対象は上の世代)が『ゲッター』に興味を持ち、その結果最初に触れる作品が石川版だったのである。その結果、石川版の流竜馬のほうがアニメ版の流竜馬よりもメジャーになってしまったのである(しかし、神隼人に関してはアニメ版の方も認知度が高い。なぜだろう?)。

有名な話だが、『ゲッターロボ』最終話においては、当初の案では彼が戦死することになっていたらしい。さすがにインパクトが強すぎたのか、その役割はムサシに与えられることになったが、もし、その案が採用されていたら、『ゲッターロボG』では、いったいどんな物語が展開されていたのだろうか。興味は尽きない。

【シリーズ全般】初代スパロボからの御三家を担う『ゲッターロボ』の主人公だけあって、能力・出番ともに全キャラと比較しても上位に位置する。シナリオ中もそうだが、エピソードにも顔を出すことが多い。エキセントリックな人材ばかりのロンド・ベル(ホワイトベース隊)の中で、数少ない(?)人格者として、常にまとめ役となっているようだ。

【第2次】ゲッター1およびドラゴンのパイロットとしてはじめから登場。序盤は陸の敵にはゲッター2、空の敵にはゲッター1と使い分けされるが、旧ゲッターからGに乗り換えると攻撃力の面からドラゴンであることが多く、必然的に彼の出番は多くなる。後半ドラゴンにシャインスパークが搭載され、しかも気力不要(そもそも本作には「気力」というシステムがない)で無限使用でき、さらに竜馬自身が「ねっけつ」(本作では攻撃力三倍)を覚えるので攻撃力は味方の中でも最大となる。ただ、精神ポイントがゲッターチームの三人共用なので精神コマンドの使用は計画的に。胡蝶説得のイベントあり。

【第2次G】ゲームバランスが第2次とかなり変更しているが、味方キャラの中で最大の攻撃力を誇り、相変わらずトップエースとして活躍してくる。胡

蝶説得イベントもあり、もし彼女を説得した場合キヤブテン・ラドラと戦い、彼を助けることができる。

【第3次】物語の最初から、ロンド・ベルの一員として登場。最初はプロトゲッターに乗っている。:が、やはりパワー不足なのですぐにゲッターロボに乗り換えることになる。シナリオ全般にわたってちよくよく会話に参加してくる。

なお、今作ではシリーズで唯一「精神コマンド」に「熱血」がない。かわりに「友情」と「愛」があるため、彼だけでは少々精神コマンドの使い勝手が悪いかもしれない……が、ゲッターチームだけは他の合体ロボと違って精神コマンドを共有できるので問題は無し。胡蝶説得イベントもある。

【EX】リューネの章のシナリオ「再会」から、いきなりゲッターGで登場する。やはりシャインスパークが強力だが、今作ではダメージ上限があるため真価を発揮することができないのが残念である。

人材が少ないこともあってか、比較的リーダー的な発言をすることが多い……が、一番インパクトのある場面は「ヴォルクルス」と言えずに、「ぼるするく?」「ヴォスルクス?」と言ってリューネを呆れさせる所かもしれない(笑)。

【第4次(S)】ゲッター1のパイロットとしてはじめから登場。その後ドラゴン、真・ゲッター1と乗り換えていく。ドラゴンのシャインスパーク、真・ゲッター1のストラーサンシャインと、常に超強力な必殺技を持つため、ボス戦には欠かせない存在となっている。精神コマンド的には、「必中」が使えるのがよい。「気合」は覚えがないがベンケイが使えるので問題なし。ハヤトも使えるため忘れがちだが「ひらめき」も緊急時には役立つ。

【F(完結編)】ロンド・ベルのエースの一人として序盤から大活躍。その強さは従来シリーズ通り強力無比。精神コマンドは「努力」もベンケイに任せて「熱血」「必中」だけに集中するのがよいだろう。

戦闘時に活躍する反面シナリオにはそれほど関わらないが、あしゆら男爵に奪われたゲッターGを破壊する時や、真・ゲッターを使うことに対する早乙女博士との衝突などは必見。

流竜馬(真) (ながれりょうま)



原作 ゲッターロボ號(マンガ版)

参戦作品 新

性別 男

所属 なし

職業 武道家

出身 地球(日本)

種族 地球人(日本人)

主な搭乗機 真ゲッター1

声優 神谷明

【原作】真・ゲッター1の操縦者で、通称は「リョウ」。実戦空手を提唱する実父、流一岩に幼少の頃より実戦空手の英才教育を受けて育っている。

全国空手道選手権大会を一人で襲撃壊滅させた直後、早乙女博士による体力テスト(殺し屋との戦い)に重傷を負いながらも合格。その強靱な体力と不屈の精神力に惚れ込んだ早乙女博士により、ゲッターチームに強制入隊させられる。恐竜帝国の脅威に戸惑いながらも、ゲッターロボの凄まじいパワーに魅せられ、恐竜帝国(後に、百鬼帝国)との人類の存亡を賭けた戦いを決意する。尚、対恐竜帝国戦ではゲッター1(イーグル号)を、対百鬼帝国戦ではゲッター1(ドラゴン号)の操縦を担当してい

た。

百鬼帝国滅亡後も早乙女研究所に所属、ゲッタードラゴンの操縦者として後輩の指導に従事していた。その際に、一度恐竜帝国の生き残りによる『ゲッターG強奪事件』が発生しているが、ゲッターロボにて出撃、これを阻止している。

真・ゲッター1搭乗はその後暫くしてから。突如、宇宙から飛来した謎の巨大物体迎撃のため、出撃したリョウ達は、何者かに大幅に強化・改造された百鬼帝国の長、死んだ筈のブライ大帝と遭遇する。両ゲッターは、ブライ大帝にまったく歯が立たず壊滅状態に陥るが、当時秘密裏に開発されていた真・ゲッターロボが、ブライ大帝の力に反応してひとりにて起動。リョウ達三人は、改めて真・ゲッターロボで出撃すると、圧倒的なパワーとスピードでブライ大帝を倒す。しかし、あまりにも強大な力を持つ真・ゲッターロボに戸惑いを隠せなかったようだ。

時は流れ、ゲッターエネルギー暴走より十五年後、世界征服を企図するプロフェッサー・ランドウとの戦いが激化。神隼人は、早乙女研究所内の封鎖を解いて真・ゲッターロボを起動させる。そして動かせる最後の人間は「流竜馬」唯一人。ゲッターを動かすことを頑なに否定するリョウ。しかし、復活した恐竜帝国の巨大な陰謀を阻止すべく、また人類を守ることでできる最後の手段として、リョウは自ら真・ゲッターを操るのであった。

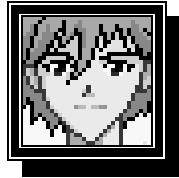
アニメ版・流竜馬とは大幅に異なり、かなり男っぽい(ガサツな)性格である。戦闘能力およびサブパイロティは非常に高い(というか、それがゲッター搭乗の条件なのだ)。精神力はこう見えて結構繊細。しかし人類を救うための戦いにおいては強靱な精神力で戦場に赴き、戦いに臨んでいた。

「隼人、なぜゲッターを動かしたあ！ 貴様地球を滅ぼすつもりかあ！」

【新】後半唐突に、ハヤトが封印を解いて起動させた真・ゲッターロボに、ハヤト・ベンケイと共に乗りこみ、対バルマーとの戦闘に参加する。

戦闘能力的には結構高く、二回行動発動レベルに關してもスーパー系パイロットとしては非常に早い(Lv37)。また、一回行動発動後の真・ゲッター2とのコンビネーション(真・ゲッター2で移動および回避行動。その後真・ゲッター1による攻撃。逆も可)は、相変わらず非常に使える。ただ、これもまた精神コマンドに「魂」がない。尚、当然ながら顔は原作者の石川賢氏書き下ろしである。

渚カヲル



原作 新世紀エヴァンゲリオン

参戦作品 F完結編

性別 男(?)

所属 ネルフ

通称 ファイフスチルドレン

出身 地球(?)

種族 使徒(第17使徒タブリス)

声優 石田彰

【原作】アスカの精神崩壊と零号機の消失により戦力が低下したネルフに、ゼーレから配属されたファイフスチルドレン。過去の経歴がすべて抹消されている上、生年月日がセカンド・インパクトと同じ、さらに自由にエヴァとのシンクロ率を変えられることができるなど、とにかく謎の多い少年(もつともリツコなどは「最後のシ者よ」といかに何か知っている

ようであり、ゲンドウと冬月も彼が使徒であることには驚いていなかったのだが……)。レイと同じ赤い瞳を持つ。その正体は第17使徒タブリスである。友人やずがるべき者をすべて失い、失意に沈むシンジの前に突如ベーター・ベンの第九をロクザみつ、「歌はいいねえ。歌は心を潤おしてくれ。リリンの生み出した文化の極みだよ」との、わけのわからないセリフと共に現れる。ネルフに配属されると同時に、彼の行動は常にシンジを中心に動くようになり、一緒に帰ったり、一緒にお風呂に入ったたり、自分の家に泊めたり……と二人の仲はどんどん親密になっていく。今までかけられたことのない直接的な好意により、シンジにとっては彼は誰にも話したことのない過去や本音を語れるような存在になっていった。

しかし、彼はネルフ内でその正体を現す。そう、彼こそが最後の使徒タブリスなのであった。式号機を支配下に置き、それまでの使徒と同じく、地下のアダムへ向かいゆつくりとセントラルドグマへ降りていったのである。そのカヲルを初号機で追いかけるシンジ。自分が初めて心を開いた相手が使徒であること、好意を寄せながらも父親と同様に自分を捨てたこと。それらに対する怒りと動揺を押さえないシンジ……。だが、そのシンジの前で彼はATフィールドを展開し、自分が使徒であることを証明した。そして最後は自ら望んで、シンジの乗る初号機の手の中で死の眠りへうつ。すべてを悟りきったような、謎めいた言葉を残して。

彼の言動は、徹頭徹尾わけがわからず、シンジじやなくても「カヲル君……君が何を言っているのか僕には分からないよ」と言いたくなる。この辺りの言い逃れのできないほど破綻したストーリーが、あの異常とも言えるエヴァアームを作り出した一因となったのだから、わからないものだ。そう考えれば謎をふりまくだけふりまいて退場したカヲルという存在は、エヴァンゲリオンという作品にとって非常

に大きい役割を果たしたとも言える。
余談だが、この回のタイトルは「最後のシ者」。
この「シ者」は「使者」「死者」「渚」といった見
方もできる。

劇場版にも登場、巨大化したレイの腹の辺りから
まるでプラナリアのごとく生えてくる（こんな異常
な状況でもシンジは彼を見た瞬間微笑みを浮かべ
た）。

その後は「シンジの望んだすべてが一つになった
世界」にも登場。他の登場人物はシンジの感情が生
んだ人物という可能性も考えられる中、彼とレイだ
けは、純粹に別人格として存在していた。そして最
後にシンジの「君たちは何なのか」という問いに対
して「希望だよ」と、最後まで謎めいた言葉を残す
のだった。

また、ゼーレが投入したエヴァ量産型のダミーブ
ラグはどうやら彼のデータを元に作られたようで、
そのプラグには「KAWORI」と書かれていた。

「ありがとう、君に逢えてうれしかったよ」

【F(完結編)】原作とまったく同じようなシチュエ
ーションで登場。もともとトウジが誕生日イベント
にしか登場しなかったため、フィクスではなく、フォ
ーストルドレンになっている。彼が登場する、通称エ
ヴァルトは、内容もほとんど彼のためにあるよう
なもので、もはや彼の一人舞台である。彼が出る
と聞いて初号機を暴走させまくった人は多いのでは
ないだろうか？ しかしシンジの友達となるカトルが
仲間にならないと登場というのは原作の雰囲気を表
しているというかなんというか……。

原作とは異なりエヴァ参号機に乗って登場するが、
その戦闘力は未知数である。なぜなら空への攻撃手
段がなくまず確実に一方的にのされてしまうからだ。
しかし彼のセリフや専用BGMがかなり面白いので
ぜひ会ってほしい。もちろん彼を倒すと原作通

りのあのシーンが再現される。そして物語はパッド
エンドへと進むのである。

ナセル・ザンボス



原作 魔装機神系オリジナル
参戦作品 EX
性別 男

所属 シュテドニアス軍

出身 地球(ラ・ギアス)

種族 地球(ラ・ギアス人)

主な搭乗機 移動要塞

声優 塩屋 浩三

【EX】シュテドニアス軍の士官。マサキの章、シ
ュウの章に三度にわたって登場する。どうやらシュ
ウを追跡しているようであるが、詳しいことは不明
な夜道で出会った子供が泣き出すような、非常に
わかりやすい悪役ヅラをしている。たいした個性も
無く忘れ去られていくEXの登場人物の中では、そ
の凶悪な面構えのおかげで覚えてもらえるかもしれ
ない。普通ならチャーム・ポイントともなるであろ
う八重歯を持つが、彼の場合には余計に狂暴さを引
き立てているようである。作戦行動中に次々とマサ
キやシュウの前に醜態をさらすような真似をしてい
た。どうやら知性の方も高いとはいいかねるようだ。
セニアをモニカに見せかけて人質にしようとした
のは彼の作戦だが、やはり王位継承権のないセニア
よりモニカの方が人質としての価値が高いと考えた
のだろう。もともとマサキはそんなことにこだわら

ないと思うが、**魔装機神**に登場しないところを見る
と降格されたか戦死したのだろうか。

なお、EXのオリジナル・キャラにはルックスと
パイロット能力の間に相関関係があるという経験則
があるが、彼の場合はゴールド・パゴルドとほとんど
一緒。エリート兵以下かもしれない。

ナナイ・ミゲル



原作 機動戦士GUNDAM 逆襲のシヤア
参戦作品 第3次 新
性別 女

所属 ネオ・ジオン軍

階級 戦術士官兼ニュータイプ研究所長

出身 地球圏

種族 地球人

主な搭乗機 レウルローラ

声優 榎原 良子

【原作】ニュータイプ研究所長で技術士官。階級
は大尉。シヤア・アズナブルの秘書的存在にして愛
人。常にシヤアと共にあり、ララァ亡き後のシヤア
の精神的支えとなった数少ない女性である。
有能な秘書、ニュータイプ研究所を切り回す才能、
そして何よりも美しい容貌。シヤアのような気の多
い男が、彼女の心を独占しているという事実が非常
に信じがたく、かつ勿体ない。非常に母性的な部分
と、クエス・バラヤのような小娘にヤキモチを焼く
可愛らしい部分とを併せ持っている。
士官としても優秀なためシヤアの部下からも一目

置かれているらしく、他の士官が持て余し気味のクエスの扱いを任されたり、戦闘の配分を任されたりと結構忙しかったようである。ギユネイや他の部下が陰口を叩いていたように「シヤアに取り入って現在の地位を手に入れた」だけなら、ここまで実質的に采配を任されるはずはないのである。

結局は、自分の都合しか考えないシヤアに対して献身的に尽くしていた。極力、彼の手を煩わすことのないよう気を配り続けていたのである。

ニュータイプではなかったが、やはりニュータイプ研究所所長だったせいもあってか、非常に勘が良く、感覚的にはかなり鋭かった(クエス・ハサウエイ・チェーン)の三人の争いと死に反応し、軽い頭痛を起こしていたようだ)。

アムロとの最後の対決の際、シヤアの放った「ナイ！ 男同士の間に入るな！」という一言。彼女は「自分が置いて行かれる」ことに非常に怯えていた。作中、光に呑み込まれていくサザビーのコクピットをレウルーラから見ながら、彼女は嗚咽する。

おそらく、過去のラアラをはじめとする女性関係の数々も、野望も総て承知の上で、ただ一人自分だけは彼の側に最期までいようと誓っていたのだろう。だとしたら、哀しい女性である。

「大佐の……大佐の命が、吸われていきます……」

【第3次】シヤア(クワトロ)が仲間でなければ、シナリオ「魔装機神」にNPC(しかしメーカーは赤色)として出現。もともと、戦力としてはラアラがエルメスで二回行動なのに対し、ナイはムサイで一回行動なの差は大きい。敵の攻撃に沈んでしまう危険性大である。

【新】原作同様シヤアに付き添っているものの、どうにも印象に残りにくい。クエスとのやりとりの一つであれば……。初登場時のシナリオ「蒼き流星となつて」で、レウルーラに乗っている描写はある

のだから、そのまま指揮をとればよいのに。

浪花 十三(なにわじゅうぞう)



原作 超電磁ロボ コン・バトラーV
参戦作品 第3次 第4次(S) F F完結編

性別 男

所属 南原コネクション

特技 射撃

出身 地球人(日本・大阪)

種族 地球人(日本人)

主な搭乗機 バトルクラッシュシャイ

コン・バトラーV

声優 山田 俊司(現・キートン山田)

【原作】バトルマシン2号機であるバトルクラッシュシャイのパイロット。関西出身。長身で、私服姿であるトレンチコートに帽子というファッションのせいもあり、コン・バトラー隊の中では最も大人びた雰囲気をもつ。オリンピッククラスの腕前をもつ射撃の天才で、それゆえ、数々の飛び道具をもつバトルクラッシュシャイのパイロットに選ばれた。

彼と射撃との出会いは彼がまだ幼い頃にまで遡ることになる。当時、彼は浪花屋旅館(恐らく彼の実家と思われる)の裏池を遊び場に使っていたが、その時よくいっしょに遊んでもらっていたのが、警部補の真岡という人物(現在は南原コネクションのガードマンを勤めている)であった。彼は十三のことを「ボン」と呼んでかわいがり、いっしょに石投げなどをして遊んでやっていた。彼は警察きつての射撃

の名人であったが、当初、十三はそんなことは知らず、あざやかに石を投げる真岡をただ感心して見ているだけであった。こうして真岡との交流が続いているうちに、彼に影響される形で十三は射撃に対して興味を持つようになったものと思われるが、八歳の頃には射撃大会で優勝するほどのめりこんでいた。また、後にグレていた彼を自分の家に引き取って面倒を見ていた、刑事の「山さん」からも射撃を教わっており、射撃のプロである二人の人物から手ほどきを受けたということが、彼を天才的な射撃の名手に仕立て上げたのである。

成長した彼は射撃の天才として世間にも名が知れるようになり、警察からスカウトがくるほどであったが、彼はこれを断っている。真岡や山さんといった警察関係者に親しい人物がいたにもかかわらず、こと警察という組織に対してはあまり良い感情をもっていないのであろう。このあたりは普段から警察を煙に巻いていた豹馬と共通するものがある。そんな彼が、南原コネクションからの誘いには応じ、関西からはるばるかけつけたのである。ほとんど目的も知らされていなかったはずだが、恐らくはコネクションへ一刻も早く合流できるようにと渡された、警察さえ手出しできないほどの効力をもつ「特別許可証」の存在が彼の興味をひいたのであろう。

そうして南原コネクションにやってきた十三は、初めてコン・バトラーVを見せられた後、十分な説明も受けないうまま、いきなりバトルクラッシュシャイに乗せられてしまう。当然とまどいを見せるが、南原博士の「射撃の天才である君にまかせたい」の一言は、彼を納得させるに十分であったようだ。他の隊員もそうだが、自分の資質と見事なまでにピッタリなため、初めて乗るマシンでも不安は最低限に押さえられたようである。このあたりは、恐らくパイロットの選出にかなりの時間をかけたであろう南原博士の思惑どおりになったものと思われる。こうして、コン・バトラー隊の一員として、バト

ルククラッシャーを操るようになった十三であるが、その腕前は他の隊員からも羨望の眼差しを受けるほどであった。コン・バトラー隊員に選ばれた者はそれぞれ何か人より突出した才能を持っている者が多いが、こと戦いに関してはほとんど素人ばかりであった。そんな中であって、射撃の天才であるという十三の資質は、非常に実戦向きであったといえる。また、センスの良さに加え、どんな困難な状況でも決してあきらめない意志の強さも持ち合わせていた。彼は一度、豹馬とのケンカが元で目が見えないまま戦闘を行ったことがあったが、その時にも目が見えないというハンディを逆にとり、目に頼らない戦い方を編み出し、見事にやっつけてのけている。彼はパイロットとして非常に優秀であったが、それ以外の時でもその活躍はよく見られた。特に射撃がらみの活躍が多く、彼の射撃によって人が救われたり、ピンチを脱する場面が何度もあり、ここぞというときに彼の射撃は非常に頼りになった。その射撃の正確さは正に神業ともいえるものであった。

もともと合理主義的な性格のためでもあるが、彼は何よりもまずコン・バトラー隊員としての義務を優先しようとする傾向があり、そのクールな認識はどちらかといえば人情家の多い他の隊員とは一線を画すものであった。「任務のためなら一切の感情を殺す訓練はできてるつもりや」と言い放ち、私情にかられて任務をおろそかにする隊員に対して厳しい態度をとることもあった。だが、それはコン・バトラー隊員としての責任の重さを誰よりも認識しているがゆえのことであった。実際、彼がいかに任務のことを思っているかを物語るエピソードがある。一年前、全日本ライフル射撃大会に出場した彼は決勝にまで進んだが、その決勝の相手である山本とはお互い一步も譲らず、結局勝負はつかなかった。再戦を約束して山本と別れた十三であったが、一年後、山本からの再戦への誘いが書かれた便りを受け取った彼は、山本との再戦のために任務を放り出すわけ

にはいけない、と一人思い悩む。結局、他の者に促される形で山本の決着に向かったのだが、自分からは決して誰にもその悩みを打ち明けることはなかった。自分の生きがいともいえる射撃以上に、コン・バトラー隊員としての任務は大切なものだと思える十三の生真面目さを物語るエピソードといえる。

コン・バトラー隊に物語るリーダーといえる豹馬だが、サブリーダーといえるのがこの十三である。それゆえ、豹馬がいけない時は、彼に代わって十三がチームの指揮をとっていた。二人とも負けん気の強さでは譲れないものがあり、そのためよく衝突を引き起こしていた。特にコン・バトラー隊結成当初は、彼らのケンカのおかげでコンバインに手間取るなど、チームワークを乱す原因ともなっていた。だが、お互い根はサツパリした性格であったため、ケンカしながらも序々に信頼するようになっていった。

なお、よくいわれることだが、彼の使う関西弁は非常にでたらめで、アクセントなど全然ない。しかし、とりあえず関西人らしい(?) ストレートな感情表現や、コミカルさといった独特の雰囲気は再現されている。初期設定では彼は守銭奴ということになっており、そのため「守銭奴II関西人」というごく安易なイメージにより、関西人という設定が与えられたようだ。だが、劇中では彼が守銭奴であるという面はほとんど見られなかったため、結局関西人という部分だけが残った形になった。しかしながら、関西弁を使わせることにより、とかく一つのパターンに陥りがちなこの手のキャラに一風変わった味付けを施し、安彦氏の温かみのあるキャラデザインともあいまって独特な味のあるキャラクター作りに成功している。

【第3次】 最初はバトルクラッシャーで登場。が、3ターン目には合体するのであまり活躍せず。その間に豹馬とともにマグマ獣に向かって加速突進していきたくなるが、彼が落とされると豹馬同様、即ゲームオーバーになるので無理は禁物。それ以外では

シナリオ「赤道直下」が唯一の活躍の場か? なぜか「必中」を持っていないのが残念。またその精神コマンドも合体時には使えないので意味がない。初登場時に、彼の脳波がちよっと一致しないあたり、原作第1話をうまく採用している。

『コンプリートボックス』では彼等の精神コマンドも使えるようになり、「加速」や「ひらめき」等はもちろん、今作でしか持っていない「熱血」を手く使うことで総合力が格段に飛躍した。

【第4次(S)】 やはりいきなり合体するので活躍の場はない。今回はバラで戦うことはまずない上、前作以上に合体系の面々が増えたため、個々としての活躍及び出番は皆無である。しかし**第3次**と違って、今回はしつかり「必中」「集中」を持っているところ(しかも最初から)、より原作に近くなった。また今回から合体中も同乗パイロットの精神コマンドが使えるので、その優秀な補佐コマンドで命中回避担当として思う存分豹馬を補佐してもらおう。

【F(全結編)】 シナリオ「大ピンチ! コン・バトラーV合体不可能!」において、豹馬、ちずるのいない戦いを強いられる。ここで大作と小介を上手くまとめるあたり、コン・バトラー隊ナンバー2の面目躍如である。戦力的にも十三が要となり、普段サポートに使うコマンドを自分のために使用して戦う様子はなかなか燃える。クリア後離脱し、シナリオ「ミリアの決意」からの復帰となるが、復帰後はまたコン・バトラーVでの参戦となるので**第4次(S)**同様豹馬のサポートに徹す。次のシナリオ「大將軍ガルーダの悲劇」において、また強制的に分離戦闘になるが、ここで豹馬とのコンビプレイでマグマ獣を一機倒すのも一興。

ナブルー・ハタリ

原作 伝説巨神イデオン
参戦作品 F 完結編

性別 男

所属 ソロ星空軍→ソロシッパ

出身 地球

種族 地球人

主な搭乗機 ソロシッパ

声優 井上和彦

【原作】ソロシッパの操舵手。左右で太さの違う眉が特徴。当初はあまり目立つた存在ではなかったが、逃亡が進むにつれブリッジにいることが多くなり、いつのまにやらジョリバ以上に視聴者に知られるキャラクターとなった。

意外と不精者で、靴下を四日間替えていないことをコスモに指摘されても、まったく意に介さずさらつと受け流していたことがあった(思わずコスモが鼻をつまむほどなのだからよっぽど……なのであろう)。

操船に関してはピカイチの腕を持っており、またベスに意見できるほど士官としても明晰な判断力を持っていて。モエラが死に、ベスが病に倒れ、イデオ・ノバのメインパイロットが不在となった時には、自らの判断でギジェを替わりに据えるといった思い切った決断を下している。

だが、かつて彼はベスを裏切る行動をとったこともある。ブラジャー脱出後、追ってくるパップクランの所在がわからぬため、地球へ向かうか否かともめるソロシッパの中において、シエリルを筆頭とした一部の者達が、パップ克蘭およびベスに対する人質としてカララを連れ出し、ブラジャーで調達した小型船キヤリオカを使って、ソロシッパを脱走するという事件が起きた。そのグループに彼は加わっていたのである。しかし、彼らはパップ克蘭に捕まり、イデオン引き渡しの交渉材料にされてしまうこととなる。顛末としては、コスモの奇策によって敵を倒し、全員無事にソロシッパに帰還したのだが、この際、カララが「自分が脱走の張本人だった」と偽ってくれたことよって、ソロシッパ内に不和が

起きることは防がれた。だが、これにより、彼はカララに借りを作ったことになる(これは、ハタリに限ったことではないが)。私見であるが、この借りを返すためにもそれまで以上に自らの責務を果たすことを彼は肝に銘じていたのかもしれない(脱走事件以降、ハタリは副官としてかなり目立ち出し、積極的意見も出している)。

パップ克蘭総軍との最終決戦においてもベスのよきサポート役として奮闘していたが、バイラル・ジン間近へのデスアウトの際、ジョングによる白兵戦でソロシッパに潜入していたパップ克蘭兵の銃弾により絶命する。しかし、最後の仕事でデスブレイキというのも、まことにハタリらしい死に様であった(ただ、このシーン、ハタリのセリフからすると、イデオがデスブレイキをかけたようにもとれる)。

因果地平において、見せつけるモエラとラポーをうらやましがるセリフから、実のところ好きで独り身をやっていたわけではなかったことを伺わせる。

「ばかな!? おれはまだなんにもしじゃないんだぞ……」

【F完結編】カワツセやエイブと同じ、いわゆるブリッジ顔キヤラ。とはいえ、この人がいないとイデオンらしく(というかソロシッパらしく)ない。ベスとのやりとりは、まんま作品の雰囲気再現している(余談ながら、イデオンでのコスモ・カーシャ、ギジェのやりとりも再現度が高い)。登場を決めたスタッフに、イデオンフリークがいるのだろう。

南原 ちずる(なんばらちずる)



原作 超電磁ロボ コン・バトラーV

参戦作品 第3次 第4次(S) F F完結編

性別 女

所属 南原コネクション

趣味 ビアノ

特技 水泳、体操

出身 地球(日本)

種族 地球人(日本人)

主な搭乗機 バトルマリン コン・バトラーV

声優 上田みゆき

【原作】コン・バトラーVを開発した南原博士の孫娘。バトルマリンのパイロットでコン・バトラー隊の紅一点。いくつかの博士号を持つ秀才で、コン・バトラー開発の助手の他、医学手術の助手も務め(7話、豹馬の人工細胞腕移植手術、ピアノを奏で、体操選手ばりに平行棒もこなし(31話)、多方面の才能を有する才女。しかし、放送当時の児童雑誌の紹介では「バラが好きな女の子」とだけ書かれていた。

明るく活発で思いやりがあり、裏表のない一途な性格で才能豊か、それでいて嫌味がなく、蛇が大きい苦手だったり(50話)いう女の子らしい脆さも持つ、ある意味完成されたヒロイン。背中にほくろがあるらしい(40話)。

初対面のコン・バトラー隊員四人が見とれてしまう程の美少女とされてはいるが、実際、安彦良和氏の手になる当時にはまだ珍しかったいわゆる「アニメ絵」の彼女のデザイン(特に、アニメならではの「緑色のロングヘア」は当時としては画期的であった)

は、コン・パトラー隊員だけでなく、多くの男性視聴者の目も奪い(笑)、熱烈な支持を受け、今なお根強い人気を誇る。

単に可愛いだけでなく、上記のように多方面の才能を有してもいるのであるが、他のコン・パトラー隊員が一点集中の突出した一芸持ちであるのに比べると、逆に色々なことができる結果として、これと言った長所がないためイメージ的には「紅一点」という一言でその特徴が語られる傾向にある。しかし、後番組である『ポルテスV』において同様に位置付けに当たるめぐみは、「くのー」という個性を突出させ、他の男性キャラと肩を並べられるようになった結果、ヒロインらしさが希薄になってしまったという面もあるので、彼女の場合はこれで良かったと言える。

さて、取えて指摘するまでもないが、ちずるはロボットアニメ史上初めて「主役ロボットの正規パイロット」になった女性キャラクターである。合体ロボットアニメのエポックメイキングとなった『コン・パトラーV』は、同時にこれまでの「後方にあつて主人公を見守る」か、「性能の劣るメカで出撃してピンチになる」のどちらかであったロボットアニメのヒロインに「主人公と共に戦う対等の仲間」というポジションをごく自然に実現することに成功している。ちずるはコン・パトラー隊の紅一点であるが、彼女一人が欠けてもコン・パトラーは合体でまないとという点では、他の隊員と同じ立場であり、十蔵や大作と同じように前線において戦闘に参加しなくてはならない。主人公の豹馬が「同じコン・パトラー隊員なんだから、女だからって甘えは許されないんだぞっ!」という主張を持っていることもあり、彼女は当時のロボットアニメのヒロインとしては非常に珍しいことに、本編中一度も主人公に助けを求めている(戦闘パイロットとしてのカラーが強く出ている『グレートマジンガー』の炎ジュンですら、ピンチに陥って鉄也に助けを求めることは多

い。『コン・パトラーV』以前では、このように「助けを求めないヒロイン」としては、『ゲッターロボ』の早乙女ミチルが挙げられる)。ダイナミック系のヒロイン等と比べ、ずつと柔らかなタッチの外見と、この中身の気丈さのバランスもまた、彼女の魅力と言える。

実際、本編中においても彼女はこれまでの「守られていだけるだけのロボットアニメヒロイン」のイメージを払拭するかのごとく、コン・パトラー隊の一員として強い意志をもって戦いに望んでいる。第24話では心臓弁膜症の悪化を皆に隠し、激痛をおして戦いに臨み、第32話では両手を凍傷しながらも、治療を後回しにして戦いに向かおうとする。彼女の生みの親である長浜監督は、後に「テレビアニメに出てくるヒロインは現代の男性社会の風潮をもろに反映し、優しくて可愛いだけ」とか「彩り」という価値しか持たないものがほとんどである」という女性評論家の発言に対し、「彼女は『關将ダイモス』を見たことのない人である」と応えている。長浜監督は、ロボットアニメのヒロインをただ可愛いだけの番組の添え物では終わらず、明確な自我と行動力を持つキャラクターとして描き、その集大成が『ダイモス』のエリアであるが、その予兆はすでにこのちずるにおいて始まっていたと言える。さらに遡れば、『勇者ライディーン』においても、監督交代後ヒロインのマリがブルガーに搭乗して戦いに参加するようになつたのも、長浜監督には「ヒロインを番組の添え物では終わらせず、自分の意志で主人公と共に戦うキャラクターとして扱う」という考えが、最初からあったからと見受けられる。

しかし、主人公と対等の立場で戦闘に参加するといつても、彼女の役割は主にメンテナンスタなどのサポートであり、単純な戦闘要員ではないところで、上手く女性らしさを表現している(後番組の『ポルテスV』の岡めぐみは、普通の戦闘要員となつたところがちずるとの大きな差となつている)。本編中

に、戦場で応急修理を行う場面が結構あつたこともあり、「修理担当」の役割分担の必要性が十分画面で表現されていたことも、彼女の存在に説得力を与えている。さらに、ロボットアニメのヒロインではありがちとされた、博士の親族という設定も、「修理担当」コン・パトラーの構造に精通している」という裏付けに上手く繋がって(科学知識全般とそれを応用した分析・開発に置いては、小介の方が優れるが、ことコン・パトラーVのメカニックに関しては、開発段階から関わっていた彼女に一日の長があるというわけである)、ありがちとも思える設定でありながら、南原ちずるというキャラクターにおいてはそれらが互いにプラス方向に作用していた。

彼女には祖父・南原博士の他に肉親はいないようだが、本編において他の家族は登場していない。コン・パトラー隊員として気丈に戦えたのも、あるいはコン・パトラーに地球の未来を託して逝つた亡き祖父に対する想いからであつたかもしれない。しかし、その思慕の念ゆえに、ホログラフの南原博士に誘われてワルキメデスの第二コネクションの罠に陥つたこともある(35話)。

ところで彼女を語る上で、ある意味外せないのが多くの男性ファンに注目を集めた「シャワーシーン」である。彼女は本編中に置いて都合三回シャワーシーンを披露しているが(16、31、40話)、アニメにおいて女性の裸が描かれること自体がまだまだ珍しかった当時において、シャワーという形でその一死纏わぬ全身を画面に曝した(和風の入浴シーンの場合、湯船に浸かった部分は見えないわけである)

彼女の潔さ(笑)は、他作品のヒロインの追隨を許さぬ強烈なインパクトを視聴者に与え、東映より発売されたLDでは、この三回のシャワーシーンにはそれぞれ独立したトラックが割り振られている程である。『ガッチャマン』のG3号ばりの「ミニスカートの戦闘服」による、煩雑な「パンチラ」(設定

ポーズにすらパンチラの設定画がある!)と相まって、清潔なお色気のアピールも彼女の根強い人気を語る上では外せない(もともと、この「ヒロインのお色気シーン」については、長浜監督が富野監督より引き継ぐ形で初めて手がけたロボットアニメ『勇者ライディーン』において、富野監督の頃よりヒロインの桜野マリに頻繁にパンチラシーンを用意し、視聴者サービスマスに努めていた点を、長浜監督が吸収したものかもしれない。以降の長浜作品においては、こういった視聴者サービスマスが見られない点をふまえると、これは富野監督の芸風と見るのが妥当ではなからうか?)。

同じコン・パトラ隊員の葵豹馬に好意を寄せるが、ちずる自身そのことを自覚したのは強敵マグマ獣モグマの前に敗北を覚悟した時であった(31話)。それまでも、豹馬を意識しているような態度は時折見られていたが(11話等)、これ以降、ちずるの豹馬に対する想いは態度にも明確に現れるようになる(が、豹馬の方はさっぱり)。

実は、ちずるの様に明確に(恋愛感情として)「好きだ」という気持ちを本編中で明言したヒロインは、ロボットアニメでは前例と言えるのは桜野マリくらいで、まだまだ児童層を対象とするロボットアニメでは、大きく取り扱われる要素ではなかった。長浜監督は、この「主人公とヒロインの恋愛」という、それまでロボットアニメでは物語の副次的要素として軽く取り扱われるに止まっていた要素についても重要な要素として物語に組み込み、その頂点として『ダイモス』を生み出すのであるが、ちずるはその前兆とも言える。

豹馬への愛を自覚して以降のちずるは、端から見ている分には明確に、その気持ちが態度にも現れるようになる。特に、豹馬が超獣シリリスの狩りの対象として狙われ重症を負った時には、我が身を身代わりにしても豹馬の命だけは護ろうとする(43話)。しかし、それは決して安易な自己犠牲ではなく、マ

グマ獣をも容易く引き裂くシリリスの姿を見てなお、豹馬の身代わりに死ぬのではなく、あくまでもシリリスに立ち向かうという姿勢が、ちずるが「守られるだけのお人形のようなヒロインではない」所以である。ところで、本エピソードにおいては超電磁タツマキとスピンのかけ声をちずるが行っているが、これを豹馬以外のメンバーが行ったのは全編を通してこの一度だけである(また、この時はコン・パトラに合体したものの、重症の豹馬はほとんどコン・パトラの操縦ができず、戦闘は基本的に十三と大作によって行われており、コン・パトラの「五人で分担して操縦する合体ロボ」である点が良く出ていたエピソードとしても秀逸である)。また、このエピソードのラストで豹馬の車椅子を楽しそうに押している姿がほほえましい。

ちずるの想い人である葵豹馬の方は「色気より食い気」のわんぱく小僧なので、ちずるの想いもなかなか報われないが、さすがに徐々に通じるようになり、本編のラストでは戦いを終えコネクションを去る仲間を二人肩を並べて見送り、『超電磁ロボコン・パトラV』のエピソードは幕を下ろす。

【第3次】「補給」をLv5で覚えるという驚異的な数値設定だが、それが発揮される場はほぼ皆無。分離しても戦えるとは言いがたい、シナリオ「赤道直下」においても、敵が空にいるために何もできない。完全にいるだけの存在である。ちなみに『コンプリートボックス』では搭乗者全員の精神コマンドが使用可能になった。「あの『補給』の早期習得もそのままなのだろうか?」という疑問を覚えた人は多いことだろう。そしていざ蓋が開いてみれば見事にそのまま……なのはよいのだが、結局序盤は精神ポイント不足で使用不能なのであった。実際初期値が低いので無理に「補給」を使わず、普通に「必中」「幸運」でサポートするのが最良の選択だろう。

【第4次(S)】今回から搭乗者全員の精神コマンドが使用可能。序盤は「ひらめき」「幸運」などを多

用し、終盤は「補給」を使いこなすことで自給自足が可能。攻撃面をサポートする十三と大作に反して、徹底的なサポートに回るこの配分は的を射ている。

【F(F完結編)】シナリオ「大ピンチ!」コン・パトラV合体不可能!?」において初登場なのだが、豹馬を回収した後すぐ撤退してしまふ。正式な登場はシナリオ「ミアアの決意」とかなり後になるので残念に思ったファンは多いことだろう。そのため、単独で戦うことがまずないので(シナリオ「大將軍ガルーダの悲劇」での戦闘では残念ながら足手まとい)、実質コン・パトラ隊で最も戦闘しないキャラとなった。精神コマンドの用途は基本的に【第4次(S)】と大差はないが、精神ポイントの量が減ったことから自給自足に徹するには少々辛いだろう。「補給」はいざという時に使う程度の方がよい。

(に)

ニ・ギョーレン



原作 機動戦士ガンダムZZ
参戦作品 第3次 第4次(S)
性別 男

所属 ネオ・ジオン軍（アキシズ）
階級 ハマーン親衛隊↓キヤラの監視役

出身 地球圏
種族 地球人

主な搭乗機 ガズアル
声優 島田敏

【原作】強化手術のため精神状態が不安定なキヤラ・スーンの副官（監視役）としてランス・ギールンと共に第42話「コア3の少女（前）」から登場。ランス・ギールンとは双子の兄弟。ギールン・ザビからの細胞から生まれたクローンだという説もあるが真偽の程は不明。ロイヤルガード専用機であるガズアル（青い方）に搭乗しキヤラの乗るゲーマルクを中央において右側の護衛として戦闘に参加した。ランスと比べて真面目で堅物である。

MS操縦の腕前は確かで、ブルツィやラカンと互角に戦い、ランスの死後もキヤラの護衛を務めるが、最終回「戦士、再び！」でグレミー・トト子飼いのNT部隊の黒いキュベレイのファンネル一斉攻撃により死亡する。強化人間であればキヤラのようにビームを弾くことができたのだろうが。

「お前のせいだ！ お前がいるとキヤラ様が変わる！」

【第3次】初登場はシナリオ「ラビアンローズ」からで原作通りキヤラと共にハマーンの配下として登場。乗機はゲーマルクと。アジールで、長射程のファンネルは強力である。

【第4次（S）】シナリオ「エウゴとの接触」でランスと共にマシユマーへの増援として登場する。特殊技能に高レベルの切り払いを持っているため注意が必要である。ラカンに順番を奪われたのか、ランスの登場するシナリオ「強襲！ 阻止臨界点」には登場しない。なぜか強化人間であり「月の裏側」で

はキヤラと共にR・アジールに乗って登場。長射程のファンネルは脅威だが、切り払いが使用不可なのが救いである。

ニー・ギブン



原作 聖戦士ダンバイン
参戦作品 EX 第4次（S）

性別 男

所属 ゼラーナ

階級 セラーナ艦長

年齢 23歳

出身 バイストン・ウエル

種族 バイストン・ウエル人（コモン）

主な搭乗機 ゼラーナ、ボゾン、ボチューン

声優 安宅誠

【原作】ルフト家の隣の領地を治める地方領主・ギブン家の御曹司にして、シヨウ達の母船となるオーラシップ・ゼラーナのリーダー。ドレイクの娘リムルとは恋仲。タレ目の美青年だが、ピンクの箒のような珍奇な髪型をしている。

ギブン家の当主ロムン・ギブンはドレイクの野心にかねてより危機感を覚え、独自にオーラマシンを開発するなど反ドレイクの動きを示していた。ニーは父の片腕としてオーラシップ・ゼラーナを任せられていたが、ドレイク軍の攻撃により館と母を、さらに父を失う。そうして国内では唯一の反ドレイク戦力となつてしまったゼラーナのキャプテンとして、

シヨウ以下のメンバーを指揮していくことになる。頭脳は明晰、武芸の腕も立ち（あまり目立たないが、ライフル一丁でオーラマシンを渡り合ったのは劇中彼一人である）、リーダーシップに富み、気さくで人を引きつける魅力もある。貴族の坊ちゃんとしてはまず申し分のない優等生だと言えるが、やはり坊ちゃんゆえや身勝手な所や、リーダーシップの裏返しとして自分の行動を何かにつけ正当化しがたがる面がある。特に恋人リムルのことになると理性が吹っ飛ばさうで、始めのうちはこれが度々シヨウ達をうんざりさせていた。余談だが『イデオンのベスや『F91』のドワイイトなど、富野監督の描く集団のリーダーにはこういったタイプ的人物が多い。

ちなみに「人を引きつける魅力がある」と書いたが、もつと正確にいうと彼は女性を引きつける。相思相愛のリムルの他にもキーンに秘かな想いを寄せられており、またマーベルやチャムなども当初は彼に惹かれてゼラーナに乗っていた様子である。彼自身はリムル一筋でそんな周囲の感情にはてんで気付かず、女性陣が揃っている前で平気でリムルの話をしてシヨウに眉をひそめられたりしていた。彼が死の際にキーンの名を呼んだことから、最後にキーンに心を移したとする見方もあるが、これはその直前にキーンが彼を想いながら死んでいることから、ニーが彼女の想いに初めて気付いたのだという意味であり、彼の心はあくまでリムルにあったのだと思いたい。

さて、そんな彼も戦いを経るにつれ戦士として、リーダーとして成長していく。感情的で身勝手な面も徐々に抜け、それにつれて仲間からの信頼も固まってくる。地上に出るからはシラー女王という巨大なカリスマの存在もあつて出番らしい出番がないが、第47話でそれまでずっと共に戦ってきた母艦ゼラーナを、自分の作戦ミスから沈められてしまった時に見せた悲嘆は印象深かった。そして最終回、彼はボチューンを駆って必死にリムルを探す（彼女が親

殺しをするのを止めるためである……キャラ名鑑リムル・ルフト参照)が、ようやく彼女のオーラを感じ取って突入してみれば、そこには無惨な恋人の死骸と、娘を撃ち殺したルーズの姿があるだけだった。激昂した彼はそのままオーラショットでルーズを吹き飛ばし、さらに激情の導くままに修羅のような戦いぶりを見せ最後に親の仇、戦乱の元凶、そしておそらく彼の目にはリムルの死の原因としても映っていたであろうドレイク・ルフトのブル・ペガーをその手で討ち落とし本懐を遂げるも、直後トリオ・コンピネーションにその身を焼かれ絶命した。彼が最後に見せた鬼神のごとき戦いは、聖戦士ならぬコモンが持てる「憎しみのオーラ力」の仇花だったのかも知れない。

「お前が殺したのか！ 母親のお前が、我が子を殺したのかあッ！」

【EX】マサキの章で神殿に急ぐルートを通るとシラ、キーンと共に仲間になる。どういうわけか「幸運」を持つている(リムルと幸せになれるせいか?)。また聖戦士技能という概念もないので、オーラ切りも自在に駆使できる。ハイパーオーラ切りはさすがに必要な気力&直感が高すぎて使用は不可能に近いが……能力は二線級だし、中でも直感が低いのは如何ともしがたいが、育てるのは難しくないし、中盤戦からはライネック&レブラカーンとかなかなか強力なオーラバトラーを入手できるので戦力として最後まで活躍できないことはない。なお、残念ながら原作のようにドレイクと戦うことはできない(別動中のマサキ達がドレイク軍と偶然遭遇するため)。

【第4次(S)】ガラリアを倒した方のルートで今度はエレ、キーンと共に仲間になる。聖戦士になれない、という時点でオーラバトラー乗りとしては引導を渡されたにも等しい。能力が二流なのは相変わらず

ずな上、「幸運」まで失っている(しかしニーの精神コマンドとしてはこの方が明らかに妥当だとは思う。「熱血」「必中」などの正当派コマンドに混じって「探索」なんか持っている腰砕けぶりや、それでも対ハイパー用に「脱力」をしつかり押さえている所など)。武器の多いビルバインあたりに乗せて、「幸運」持ちのシルキーと一緒に集中的に育てれば、分身とオーラバリアはあるわけだし使って使えないことはないが、オーラバトラーの能力の弱体化(特にHPの大幅な低下)のため戦力とするにはEXと比較にならない量の愛が要求されるだろう。シナリオ「トータル・バランス」で彼を出撃させると、ライネックを入手できるのが唯一の救いか? なお、ドレイクとの最終決戦はチーム分割後の別チームが行うため原作の再現はやはりできない。

二エツト



原作 聖戦士ダンバイン
参戦作品 EX 第4次(S) F F 完結編

性別 男
所属 クの国

通称 「赤い三騎士」

出身 バイストン・ウエル

種族 バイストン・ウエル人(コモン)

主な搭乗機 ビアレス

声優 高宮 俊介

【原作】「クの国の赤い三騎士」の一人。『ガンダム』のマッシュのそっくりさん。マッシュと同じく、

左目に傷がある。なお、ネーミングの由来は、ロシア語の「いいえ(No)」。他の赤い騎士のメンバーであるガラムティ、ダーと同じくカラーリングを変更した専用のビアレスに乗る。

第34話「オーラ・バリアー」に登場。地上に出てからゴラオンを探してヒマラヤへ向かったゼラーナと交戦。ガラムティ、ダーとともにショウのビルバインにトリプラーなる攻撃を仕掛ける。ショウを気絶させ窮地に立たせるが、チャムとマーベルの協力の前に落とされる。結局本家「三連星」のマッシュの無念をはらすことはできなかった。

【EX】リューネの章のシナリオ「シュテドニアス追撃」に登場。しかし、乗機はビアレスでなくレブラカーン。あまりにマイナーなのでガラリアの解説つきである。あえてガラリアを仲間にならず、アムロをぶつけてみるのもいい。

【第4次(S)】原作どおりゲア・ガリングに所属し、シナリオ「トータル・バランス」もしくは「ビヨン・ザ・トッド」に登場。搭乗機はまたまたビアレスではなく、ライネックである。シナリオ「栄光の落日」で再登場するときは、ガラバに乗る。……どうも、原作どおりの機体に乗ったがらないところまで「黒い三連星」に似たようである。今回はイベントがないので、ますます目立たない。

【F(完結編)】Fでは、シナリオ「浮上」にのみビアレスに乗って登場。F完結編では「悪意のオーラ」はじめとして、五つのシナリオに出現する。乗機はなぜかライネック。赤い三騎士はいつもセットで登場するのだが、なぜかシナリオ「トリーズ、立つ」では、彼が単独で現れる。仲間割れでもしたのだろうか?

西川 大作(にしかわ だいさく)



原作 超電磁ロボ コン・バトラーV
参戦作品 第3次 第4次(S) F F完結編

性別 男

所属 南原コネクション

趣味 漫画を描くこと

特技 柔道

出身 地球 (日本・鹿児島)

種族 地球人 (日本人)

主な搭乗機 バトルタンク/コン・バトラーV

声優 立壁和也 (現・たてかべ和也)

【原作】バトルタンクのパイロット。九州阿蘇山麓の農村出身で、漫画家志望。大きな体に柔和な表情が印象的な好青年。五人家族の長男で、大蔵という弟とあけみという妹がいる (この一家、男は芋みたいな顔だが、女性は美人である)。

いわゆる「気は優しく力持ち」タイプ。大柄な身体とにこやかな表情、人当たりの良い物言いから一見温厚で泰然とした人物に見えるが、なかなか頑固で負けず嫌い。目隠し訓練中にトラブルでピンチになっても決して目隠しを取ろうとはしなかった他 (39話)、豹馬や十三とも魚取り (21話) や真冬の海で我慢比べで張り合ったり (45話) している (そして、この手の争いは毎度大作の圧勝なのである)。電磁学会へ出席する四谷博士を護衛中 (この時彼はVTOL機を操縦している) に、博士をキャンベル星人に誘拐された時は切腹まで図ったりと (20話)、自己主張の強い豹馬や十三にも決して負けず自尊心の持ち主であったことを伺わせる。彼自身は漫画家志望であるが (ちなみに彼の描く漫画は動物を擬

人化したもの)、同時に柔道の達人でもある (コン・バトラー隊員としては、こちらが選定理由と思われる)。彼の柔道は、「男は根性」と断ずる叔母のお虎に幼い頃から叩き込まれたもので、彼の人格において、お虎の影響は非常に大きい。こうした大作のキャラクターは、いわゆる「九州男児」のイメージを誇張したものと構成されている。

大作のようなキャラクターは、当時五人チーム物には必ずいたタイプで、このタイプのご多分に漏れず決して目立っているというわけではないが、かと言って影が薄いわけでもない。五人の役割分担が明確なコン・バトラーにおいては、合体後も出力関係の調整、「ビッグブラスト」「バトルチェンソー」の発射などの仕事があり、コンスタントに出演が用意されていたこともあって、「コン・バトラー隊の一員」としての存在感は十分に発揮していた。そもそも彼は主人公ではないし、サブキャラクターの中でも優先順位の高い位置にはいない。最初から豹馬や十三より目立つ必要はないわけだから、その意味では、彼は出しやばり過ぎず、かと言って埋もれず、自分の役所を過不足なく果たした脇役と言える。

なお彼は鹿児島弁を喋るが、長浜監督自身が鹿児島出身ということもあり、十三のインチキ臭い関西弁とは異なり難解な表現も含んだ本格的なもの (長浜監督はキャラの台詞をすべて自分で演じてチェックし、声優に対しても細かい演技指導をする人であったことは有名な) であり、彼のキャラ立ちに大きく貢献していた。

【第3次】「気合」「根性」「下根性」と、豹馬のサポートに持つてこいの精神を装備しているが、残念ながら使用できるのは豹馬の精神コマンドだけなのでまったくの無意味。『コンプリートボックス』では五人の精神が使用可能となったので、「気合」を有効活用できるようになった。

【第4次(S)】なんと本編ストーリーで唯一セリフが一言もないというある意味偉大な男。それゆえ、

彼のメッセージを見るためにだけにわざわざ分離して戦うプレイヤーもいたという。今作からめでたくコン・バトラーVに代表される合体スーパーロボットは搭乗員全員の精神コマンドが使用可能となり、豹馬に変わって「気合」で気力を補充できるようになった。レベルが上がって精神ポイントが増えれば「熱血」もサポートすることで豹馬の「覚醒」が使いやすくなるだろう。まさに縁の下の力持ちという表現がピッタリな活躍を見せてくれる。

【F(完結編)】今作でも「気合」タンクとして活躍。だが合体してもセリフをいうケースが多いので、わざわざ分離せずとも存分にジャイオンボイスを堪能できる。ビッグブラストのセリフを喋るようになったのはなかなかポイント高し。

ニセデューク・フリード

原作 UFOロボ グレンダイザー
参戦作品 第2次 第2次G

性別 男

所属 ベガ星連合軍

主な搭乗機 ニセグレンダイザー (円盤獣ベニベニ) 【原作】第58話「悪魔にされたグレンダイザー」に登場。その正体はベガ星連合軍親衛隊員である。ガンダル司令とズリル科学長官が計画した「グレンダイザーデビル作戦」の一端を担う存在である。

「グレンダイザーデビル作戦」とは、まずグレンダイザーを宇宙へおびき出し、電磁限石によって釘付けにする。その間に一度見たモノなら何にでも変身できる能力を持ったベガ獣ベニベニをグレンダイザーに化けさせ、ご丁寧にベニベニの能力で化けたニセのデュークフリードまで乗せておく。そして、甲児達の目の前で、首にあらかじめ取り付けた爆弾を爆発させ、デュークがそのために狂ったように見せかけて破壊活動を行おうという作戦なのだ。

この作戦は、正義の味方であるグレンダイザーを

人類の敵と思わせ、なおかつ破壊活動が行える。また、厄介なスベイザーチームは、仲間のデュークが乗っているとついこむため手が出せないという余剰が付く。万一、グレンダイザーが電磁隕石から脱出したとしても、うまく本物とすり替われれば地球人に本物を攻撃させることができるはずである（当然、デュークは反撃しないという目算も含んでだろう）。作戦どおりには進行し、唯一、デュークを愛してやまない牧場ヒカルが危険をかえりみず偽グレンに接近し、偽デューク（赤い目をしている上に凶暴な目付きである）を見て偽者と気づいたものの撃墜されたためにはなされることなく、事態は国防軍によるグレン攻撃が決定されるまでに至った。

これを知った甲児は、いかに友とはいえ、地球の敵となったのならば見過ごすわけにはいかない。何より地球を愛する彼自身が悪魔になった自分を許さないことを知っているだけに、デュークが悪魔になったのならば、彼自身のために、デュークを倒さなければならぬ。そして、その役目は他の誰にも譲ることはできない。甲児は覚悟を決める。差し違えてでも悪魔となったグレンダイザーを、そしてデュークを倒すために！

折しも、電磁隕石からようやく脱出した本物のグレンは、やつとのことで地球へ帰還したが、固い決意で攻撃してきた甲児のダブルスベイザーと遭遇してしまふ。攻撃を手控えるデュークであったが、甲児の果敢な攻撃に気絶してしまふ。その隙にとどめをさそうとする甲児だったが、悪魔になったとはいえ、共に戦い、共に生きてきた仲間をその手にかけることはついにできなかった。そして、気づいたデュークから事実を知ったことで、彼は過ちを犯さずにすんだのであった。

一方その頃、デュークの妹マリアは、自分こそが兄を倒さねばと単身、偽グレンに攻撃をかけていた。そのとき、彼女の持つグレンダイザーに近づけば光りだすペンダントが何の反応もないことに気づき、

偽者であることを知る。窮地に立つマリアだったが、そこへ駆けつけた本物のデュークと甲児によって、正体を現したベニベニはスペースサンダーによって破壊された。その際に、偽デュークも巻き込まれ死亡している。

主人公のニセモノを使って、主人公を本来守るべき者たちの「敵」に仕立てる。もしくは、評判を落とすという基本的なエピソードではあるが、本編の場合は「デュークと甲児」「デュークとひかる」の絆、すなわち異星から訪れた異邦人たる主人公デューク・フリードが、異境の地で結んだ人との結びつきを描くエピソードに仕上がっている。

【第2次（G）】シナリオ「マ・クベの罠」に登場。甲児を罠にかけるためDC兵士が変装していた。しかしミノフスキー粒子下の戦闘。しかも相手がマジンガーということを考えればデュークの戦闘服のコピーでも着せておけば十分だませたと思うのだが？マ・クベは何を考えて顔まで似せたのだろうか？ちなみにこのシナリオにおいて本物のデューク・フリードは「敵にあっさり捕まり、あまつさえボスロボットに救出された」という、かなり酷い扱いを受けている。

ニナ・パープルトン



原作 機動戦士ガンダム0083
参戦作品 第3次 EX 第4次（S）

性別 女

F F完結編

所属 アナハイム・エレクトロニクス社

職業 システムエンジニア

好きなもの ガンダム

趣味 ガンダム

出身 月（フォン・ブラウン）

種族 地球人

声優 佐久間レイ

【原作】ガンダム試作1号機GP101、2号機GP102を開発した、アナハイムエレクトロニクス社の技術者。言わずと知れたガンダムマニアのお嬢様で、出身は月。GP102を奪い去ったアナベル・ガトールのかつての恋人であった。

美人ではあるのだが、性格は少々きつく、何度か言い寄ってきたキースやモンシアをまったく相手にしなかった。GP101に勝手に乗り込んだコウに対して、はじめは辛く当たっていた彼女だが、次第に心を開いていき、GP101をコウに託すようになる。そしていつの間にか、モビルスーツの操作を手取り足取り教える仲にまで発展していた。しかし、恋愛初心者のコウにはやきもきさせられることがしばしばで、コウのあまりの意気地のなさに怒りだしてしまうこともあった。

今の恋人とかつての恋人。この二人が自分の作ったモビルスーツ同士で戦いを繰り広げていくことで、彼女の心は揺れ動く。そして戦いも大詰めに迫ったとき、生身で争っていたコウとガトールの前に現れ、あろうことかコウの目の前でガトールをかばってしまい、コウを絶望させる。しかし、ガトールが死に、戦いがすべて終わったラストでは、コウの元へ戻り、彼を笑顔で受け入れた。

「いやああっ、私のガンダムがああっ！！」

【第3次／第4次（S）】第3次でのコウ、キースの参戦と共に、ロンド・ベルに合流し、それ以降はずっと、ロンド・ベル所属のメンバーをサポートしている

くこととなる。会話にはちよこちよこ顔は出すものの、特に彼女が大きく関わるイベントは無し。ただ単にコウとイチヤイチャしていただけという噂もなきにしもあらずである。ただ、このシリーズではコウとガトーが同時に仲間になることもあるので、その時の彼女がどんな心境だったのかは、非常に気になるところである。

【EX】なぜかコウ、ガトーと一緒にラ・ギアスに召喚されてしまい、その結果マサキ達と共に行動することとなる。とは言っても、本当にただ出てきただけで、特に何をしたわけでもなく地上へと帰って行った。

【F】主にメカニック(ガンダム専門)としてロンド・ベルに参加したものと思われるが、ネルフ一行がやってくるまではオペレーターもこなしていた。ガンダムに関しては知らないことはないと思いついていた彼女だけに、「私の知らないガンダム」が次々と登場してくる今回の戦いは驚きの連続であったようだ。レインとは同じく「ガンダム」に携わる女性同士ということで気が合っていたようだが、それ以外にも男性のことで同じような苦労があるという点でも共感していたようである。

【F完結編】ラビアンローズにいたミリィとはアナハイムでの先輩後輩の関係だったらしく、再会を喜んでいて。が、ガトーとの再会には意外とクールで、逆にコウが気遣うぐらいであった。このことに関しては、もうすっかり吹っ切れたようである。フルアーマー百式改を見て感激したり、コウに量産型メカガンダムの武装を決めさせたり、クワトロを説得してシャア専用ザク改のレストアを行ったりと、MS関連のイベントでしょっちゅう顔を出すのが、その他にもシエリルと共にイデの解析を行うなど、出番は意外と多い。

(ぬ)

ヌケ



原作 マジンガーZ
参戦作品 新

性別 男

所属 ボス

出身 地球(日本)

種族 地球人(日本人)

主な搭乗機 ボスボロット

声優 富田 耕生

【原作】第3話より登場したボスの子分の一人。いつもハナを垂らしているその顔は高校生とは思えないほど間が抜けているが、ボスが甲児に恥をかかされた、校内での地位が失墜した後もボスの下についていたことを考えると、周囲に流されない真の漢(おとこ)なのかも知れない(笑)。

あまり取り柄のあるような顔をしていないが、何故かスキーは上手い。彼がほとんど雪の降らない静岡県民であることを考えると、これは結構特筆すべきことである。

【新】初めての出演、しかもパイロット扱いという脅威的な出世を遂げた。ボロットが一人乗りのため、残念ながらボスやムチャとの掛け合いは聞くことが

できない。能力的には最低ランクだが、育て上げれば補助系の良質な精神コマンドを覚えてくれる。が、そこまでは地獄の道のり。技量に乏しい上にマジンガーZ、アフロダイA、スーパーボスボロットのどれかにしか搭乗できないので攻撃が当たつてくれないのだ。どうしてもというならマジンガーに乗せ、「手加減でボス級の敵のHPをギリギリまで減らす」↓「クイックセーブ」↓「スクランダーカッターで攻撃」↓「当たらなかつたらリロード」を繰り返すのが早道だろう。険しい早道ではあるが。

(ね)

ネイ・モー・ハン



原作 重戦機エルガイム

参戦作品 第4次(S) F F完結編

性別 女

所属 ボセイダル軍↓ギワザ軍

階級 13人衆

身長 125cm

年齢 21歳

スリーサイズ B90-W60-H90

出身 ペンタゴナ星系
種族 ペンタゴナ星人
主な搭乗機 オージェ、グルーン、サロンズ
声優 竹内 久美

【原作】13人衆の第四席次にしてコアム方面師団情報局副官。ヘッドライナーとしての腕前や士官としての能力も高かったことから、女性にして若輩ながら現在の地位を獲得する。この際、ギワザ・ロワウに取り入るなどの根回しもやっており、非常にしたたかな女性でもある。また、ボセイダルにもかなりの寵愛を受けていたようで、オージェを借り受けていた（ただ、借り物のオージェを傷つけるわけにはいかなかったため、当初はちよつとした損害を受けるとすぐさま退却していた）。背が高くスタイル抜群、キツメの顔立ちに姉御肌と、一目見て格好良いと誰もが思う女性だが、お茶目な笑えるシーンも数多い（アイスクリームを食べているシーンも傑作。こういうシーンを見るとネイも結構可愛く見えてしまう）。化粧セットを常に携帯している点から、非常に身だしなみに気を使うことが伺える。きつい顔立ちではあるが、ボセイダルとの謁見の際の正装姿などを見ると、上品な感じももたあわせており、案外、ヘッドライナー時は、メイクできつめにしているのかもしれない。

ヘッドライナーとしては、オージェを十二分に使いこなしていたことから見て並の能力でないことは明らかで、当初はダバがかんりの苦戦を強いられている。加えて、彼女の脇を固めるヘッケラー&アントンの存在と彼らとの連携攻撃など、それまで登場したギャブレイやチャイ・チャーより一枚も二枚も上手であった。また、力任せなリイリイ・ハッシーと違い、ギワザの下にいたことから、諜報活動などにも長け、自ら変装して反乱軍をスパイするなどの行動も見せている。ただ、意外に逆上する性格とオージェを庇うあまり、いま一歩でダバをしとめることができず、第32話では、MkIIのバスターラン

チャーを至近弾で受けたことから重症を負ったこともあった（この際搭乗していたのはグルーン。本来はこちらかOVA登場のサロンズが彼女の愛機である）。フラットが反乱軍に手を貸している事実を掴んだことから、ボセイダルへの直訴のため、表舞台から一時遠ざかる。クワサンを通して直接謁見を乞うがなかなか叶わず、ようやく謁見したものの、叛逆を画策しているギワザの動向をボセイダルはすで見透かしており、女を利用する男達を倒せと、つまりギワザを暗殺するよう言い渡される（この時、ボセイダル邸に単身潜入し、ネイによつて捕らえられたレッシイも、彼女と共にこの言葉を聞かされる。つまり、レッシイにとつては、ダバを殺せと言われたわけである。これがミアン自身の考えなのか、真のボセイダル自身の考えなのかは不明）。もし、ギワザを自分の思い通りに操れたら？ ボセイダルの言葉から、彼女はそんな野心を漠然と持つことになる。しかし、ギワザの元に戻った彼女を待っていたのは、ボセイダルのスパイという烙印であった。長らくボセイダルの元に行ったことから、彼女が裏切ったとギワザは思い込んだのである（この辺りを見ても、彼の器が小さいことが知れる）。信じていた男に裏切られた彼女は、彼への愛を見限り、ボセイダルの勅命を実行に移そうとするが、力及ばず、彼の右手を切り落としただけに終わり、逆に返り討ちにあい、ギワザの手によつてあえない最期を遂げるのだった。

富野氏の作品には『ザブングル』以降、強力な敵メカに乗るアネさん型キャラクターは数多いが、お茶目な面を見せるキャラクターとなると、彼女と『ザブングル』のグレタ・ガリーぐらいであろう。

余談ながら、永野護氏オリジナルのエルガイムストーリー（『ファイブスターストーリー』（以下『FSS』）の原型となったもの。角川ムックに掲載。現在絶版）では、彼女は反乱軍に寝返り、ダバとともに戦うとなっている（原作でもこの展開があれば

面白かったかも……）。なお、『FSS』ではミラージュナイトのレイ・エックス（立場的には子孫であるアラート・エックスの方が近い）などに、彼女を感じさせるものがあり、『FSS』にも大きな影響を与えていることを示している。

【第4次(S)】序盤からオージェに乗って登場。原作と違い、ギワザがスパイとして送り込んだりしないので、彼を信じたまま戦い続けていく。まあ原作よりは幸せな死に様かもしれないが、あんな男のために死ぬってのもなあ……。

【F】リアル系では最初のシナリオから登場。当人の能力もそうだが、オージェの能力が序盤はシャレにならないほどなので、できれば会いたくない。しかし登場回数はかなり多く、序盤におけるボセイダル軍の中心人物といった感じを漂わせている。

【F完結編】序盤は登場せず、中盤以降出るようになって、既にボセイダル軍のストーリーのメインがアマンダラやフラットに移っている中で、影は薄くなった。この頃になるとオージェの性能が他のヘビメタルと比べて低いので、はっきりいってお付きコンピの方がよいかいだったりする。

ネオ・ジオン兵

原作 機動戦士GUNDAM 逆襲のシャア
参戦作品 新

【原作】シャア・アズナブル率いるネオ・ジオン軍の一般兵士。スウィートウォーターにシャアが潜伏していた頃、秘密裏に軍事教練が行われていたのか、連邦軍に比べると遥かに練度が高い（潜伏していた旧ネオ・ジオン兵やジオン兵らをスカウトしたのかも？）。使用MSはギラ・ドーガ。劇場作品のみの登場、しかも雑魚キャラなので、それほど目立った活躍はないものの、アクシズ落下の際、押し戻そうと取り付く連邦軍の無茶とも言える行動に何かを感じたのか、銃を捨てて協力する彼らの姿は忘れられ

ない名シーンの一つといえるだろう。

【新】ネオ・ジオン系のキャラとともに何度も登場する。基本的にギラ・ドーガに乗っているが、リーオー、エアリーズ、バルマーのメカに乗っていることもある。能力的には最低クラスのザコ。

ネス・ハツシャイ



原作 機動戦士Vガンダム

参戦作品 新

性別 女

所属 リガ・ミリティア

階級 不明(通信担当)

年齢 21歳

出身 地球圏

種族 地球人

特技 ポーカー

声優 折笠愛

【原作】リガ・ミリティア所属、カミオン隊のメカニックの一人でVガンダム担当。ストライカー、クツフと共に整備を行っていたがリーンホースで宇宙に上がってからは主にオペレーターとなった。金髪のおかつぱ頭に赤いカチューシャが愛らしい。赤いベレー帽がトレードマークらしく、ノーマルスーツを来てもベレーを被っていた。

カミオン隊では数少ない女性であったが、むさ苦しい男どもに混じって働いていたせいか、実にしっかり者で勝ち気な性格のようで、整備だけでなく武器の換装、走るカミオンからの迎撃と野郎顔負けの

働きぶりは、「エステル婆さんの二代目」といった趣があった。また、なぜかポーカーが得意らしい。暇つぶしにクツフ達を相手にやっていたのだろうか？

リーンホースを持って来たゴメス艦長と漫才のような会話をしているツツコミをいれた彼女は艦長に「その減らさず口がなきやな」と切り返されていた：実はよく喋る人だったのだ。

宇宙に上がって以降、オペレーターとしての彼女はそればかりを遺憾なく發揮して、ザンスカール軍の攻撃に「本物のジン・ジャハナムはどうしたんだ！」と泣き言をいうジン・ジャハナムに「あなたがジン・ジャハナムでしょう！」とキツイ一喝を入れていた。

特攻するリーンホースJr.に居残ろうとするがレオニード爺さんに促され、他の若者とともに退艦させられた。その際、「駄々っ子のネスを下ろしたよ」と言っている連中や艦長が笑っていたところを見ると、結構、艦のオヤジ連中には可愛がられていたようだ。

避難先のハツチの上から、クツフ達と共にリーンホースJr.の特攻を言葉もなく見送る姿を最後に、彼女の一番は終わった。

【新】影の薄い他の『Vガン』キャラと違って、メインとなる戦艦のオペレーターを担当しているためか、出番が多い。他にその役割を担えるキャラ(トレス、フラウ等)がないため、その重責を一手に引きうけているとも言える。

(の)

のつそり博士



原作 マジンガーZ

参戦作品 第2次 第4次(S) F F完結編

性別 男

所属 光子力研究所

出身 地球(日本)

種族 地球人(日本人)

声優 矢田耕司

【原作】光子力研究所三博士の一人。もりもり博士にはアイアンカッターの開発やその後の壮絶な死亡せわし博士は結構セリフが多い、と目立つ場面が多いが、名前の通り「のつそり」(といつかのんびり?)しているため他の二人に比べるとはるかに目立っていない。顔はウラナリ瓢箪のような感じで、せわし博士と同じくメガネを着用。ヒゲは他の博士に比べると少しばかり学者的な感じである(三博士とも形は違うもののヒゲだけは全員生やしている。やはり学者然とするからだろうか?)。また三博士中最も身長が高くひよろつとした体つきである。目立って活躍はないものの、弓教授やもりも、せわし両博士と共に、マジンガーの整備はもちろん、新兵器の開発にも貢献している。ちなみに設定によれば、仕事は遅いが正確であり、システム工学では世界一とのこと。マジンガーのパワーアップ担当ということだが、つまりはマジンガーの駆動系、火器管制などの電装系を担っていることになる。マジンガーが幾度

も窮地に立ちながら、操縦システムなどにあまり故障がないのは、のっそり博士のおかけといえる（でも、メンテナンスの時とかは、やっぱり仕事が遅くて甲児をいらつかせたりしてそう）。ちなみに、他の二博士の専門分野は、せわし博士は機械工学、もりもり博士はエネルギー工学である。

三博士のデザインは、「デブ・チビ・ノッポ」と三人組キャラに良く見られる組み合わせであり、通常、ノッポの役割は、他の二人よりも冷静といったところ。確かに、研究所が攻撃されている際も、この博士だけはどこか落ち着いていたようにも見えなくはない（単に反応が遅いだけかも）。

一度、弓教授が留守の際、あしゅらに他の二博士と共に催眠術をかけられ、マジンガー破壊の手引きを行ったこともあった（9話）。

【シリーズ全体】第2次では、味方が撃墜されたとき、インターミッションの修理画面で登場する。それ以降は、原作と同じくあまり目立った活躍もなく、せわし博士の意見に合いの手を入れるといった程度である。